

1 2003年新課程のカリキュラム作り

学校の指導理念から 特色あるカリキュラム作りへ

2003年(平成15年)度から実施される新学習指導要領が今年3月に告示された。だが「まだ4年も先のことだし、今はまだあまりピンと来ない」という声も少なからず聞かれる。しかし、今回の指導要領の改訂は、前年の14年度から導入される完全5日制と相まって、かなり大規模な改訂となる。また来年12年度の入学生から週5日制の影響を受けるということもあり、既にカリキュラムの検討を進めている学校が少なくない。

そこでは、これまで以上に学校裁量が大いに拡大されることになった新課程において、特色あるカリキュラム作りを進めていくプロセスについて追求してみたい。

学校裁量が拡大し、カリキュラム編成もより弾力化

今年3月に告示された、15年度からの新しい「高等学校学習指導要領」のねらいと特徴をまとめると次のようになる。

14年度からの完全週5日制の導入を踏まえ、生徒が「ゆとり」の中で「自ら学び、自ら考える力(生きる力)」を伸ばせるように教育内容を改善する。そのため、教育内容を厳選して基礎・基本を繰り返し教え、その内容を確実に身に付けさせる。また能力や関心に応じて選択の幅を

広げる。必修単位数を削減する一方、学校の裁量を大幅に拡大し、カリキュラム編成の弾力化を進める。
(具体的な改訂内容は下段「学習指導要領改訂の要点」を参照)

また「ゆとり」の中で、自ら学び、自ら考える力を育成する」という方針から、中学校での教育内容も約3割削減され、「量」から「質」へと方向転換された。次ページの表は、中学校で削除される現行の学習項目、及び中学校から高校へと移行される学習項目である。つまり、いずれは遺伝の規則性やアルファベットの筆記体を知らない生徒が高校へ入学してくるようになる。高校現場には、新課程実施後は、入

学習指導要領改訂の要点(教科・科目内容を除く)	
卒業に必要な総単位数を80単位から74単位に削減する。	
週当たりの標準授業時数を32単位から30単位に削減する。	
50分の授業単位数は生徒の実態及び各教科・科目の特質を考慮して適切に定める。	
教科・科目、特別活動に加え、「総合的な学習の時間」を創設する。	
普通教科に「情報」を新設して必修とする。	
各普通教科には複数の必修科目を設けて「選択必修」を基本とする。	
学校独自の名称・目標・内容・単位数で「学校設定教科・科目」を設置できる。	
特別活動は「H R活動」「生徒会活動」「学校行事」から構成され、「クラブ活動」は廃止する。	

会が変節の時代を迎え、画一的な人材よりも、個性的で自分の考えを持ち、それを表現できる人材を求めようになってきているという社会環境の変化も背景にあるようだ。

カリキュラム作りには学校の理念が不可欠

では、新課程による高校への影響を考えてみたい。まず第一に、ゆとりの中で「生きる力」を育成できるよう教育内容を厳選し、学校の裁量を大幅に拡大した結果、新設される「総合的な学習の時間」「情報」の扱いや、特別活動、教科・科目の教育課程を見れば、その学校の指導理念が今まで以上に分かるようになると言えるのではないだろうか。

中学校での削除・移行項目	
国語	(削除項目) 朗読、表現と理解の関連指導
社会	(削除項目) <歴史的分野>ルネッサンス、ヨーロッパ世界とイスラム世界の接触、幕府の学問奨励、近代科学と文化の発達 <公民的分野> 社会生活における個人の役割、家族の望ましい人間関係、現代の文化と生活、資本主義経済、社会主義経済
	(移行項目) 物価の動き、財政収支の意味
数学	(削除項目) 平行、回転移動及び対称移動、条件を満たす図形、立体の切断・投影、数の表現<近似値、2進法、流れ図>、平方根表
	(移行項目) 数の集合と四則、三角形の重心、一元一次不等式、資料の整理、二次方程式の解の公式、円の性質の一部、相似な図形の面積比・体積比、球の体積・表面積、標本調査、いろいろな事象と関数
理科	(削除項目) 溶質による水溶液の違い、天気図の作成、情報手段の発展
	(移行項目) 力とはねの伸び、質量と重さの違い、水の加熱と熱量、比熱、水圧、浮力、月の表面の様子、地球の表面の様子、惑星の表面の様子、外惑星の視運動、花の咲かない植物、交流と直流、真空放電、電力量、無脊椎動物、日本の天気の特徴、電解質とイオン、中和反応の量的関係、電池、力の合成と分解、仕事と仕事率、遺伝の規則性、生物の進化、大地の変化の一部、地球上の生物の生存要因
外国語	(削除項目) アルファベットの筆記体

つまり、新課程のカリキュラムに学校の指導理念が色濃く反映されるため、まず学校の指導理念というべきものをきちんと再定義し、その高校の特色をはっきり打ち出すことが必要になってくる。その上で、理念に沿ったカリキュラム作りをすることが、求められていると言える。

一方、中学校までの学習内容が厳選され多くの項目が高校へ移行されるが、大学で求められる学力は今後も変わらないと考えると、高校で学習すべき内容はさらに増加することが予想される。しかしながら完全週5日制の導入や「総合的な学習の時間」「情報」の新設によって、授業時間数は逆に削減されてしまう。

したがって、この場合もやはり、知識を修得する「内容知」から、学び方を修得する「方法知」へと、授業の質的変換を行うと共に、学校としてやるべきこと、やらなければならないことを明確に打ち出し、抜本的にカリキュラム編成を見直していく必要があると言えよう。そのためには、やるべきことを判断し、周囲からも納得してもらえただけの学校の指導理念というべきものをしっかりと確立しておくことが不可欠になってくぬ。

実際に、15年度の新課程カリキュラ

ムを既に検討している学校では、まず学校の指導理念の検討から始めているようだ。その上で具体的なカリキュラム編成を考えていくと、検討もスムーズに進んでいく。新課程を単なる時間の削減、指導内容の変更として考えるのではなく、あるべき姿に向けて学校を変革する足掛かりとして受け止めたい。

ところで学校の指導理念というのは、学校の社会的存在理由でもある。それは例えば、「こころいう学校でありたい」「こころいう教育方針で指導したい」「こころいう生徒を育てたい」というような考えを示すものであり、スクール・アイデンティティ(SI)とも言うべきものである。

そして、このSIというのは具体的な言葉で表現することが重要である。どのような指導理念であれ、言語化されない限り、それは漠然とした、輪郭のはっきりしないものでしかないからだ。また、言語化されたとき初めて、それは教師や生徒、保護者や地域社会の人々の間で共有化されるものになる。そして共有化されることで、教師全員が同じ目標に向かって力を合わせて進むことも容易になるし、たとえ校内のメンバーが変わっても指導理念は確実に受け継がれていくことになるだ

る。

要は、たとえ結果的に現状のカリキュラムとほとんど変わらなかつたとしても、S Iをもう一度ゼロベースで再定義し、それを言語化、共有化することが、新課程に対応したカリキュラム作りに当たった重要なポイントと言えるのではないだろうか。

教職員研修会の実施とS Iプロジェクトの発足

では実際にS Iを具現化するために、どこについてプロセスが考えられるのだろうか。これまで検討を進めてきた学校を見てみると、まずは新課程について校内で教職員研修会のようなものを実施している。

「新課程では何が求められているか」「どのような対応が必要になるか」を全員でまず把握し理解する。教職員研修会等を行うことによって、新課程に対する教師の意識も高まり、より前向きに取り組む姿勢が生まれてくるようになった。新課程の検討に当たっては、教師全員の意識改革が非常に重要なポイントと言える。

変化に対しては、とかく抵抗感を持ちやすい。そういった意識を改め、「教員から」「学びへ」「量」から「質」へと

地域の期待や自分たちの思いを再確認

では、具体的に校内においてどのようにしてS Iの検討を進めているのだろうか。

ある高校では、「なぜ、この地に本校が存在するのか」という学校の社会的・地域的存在意義から検討を始めている。そして、「この地域から本校に期待されていることは何か」といった保護者や地域からの社会的使命や期待を確認した上で、「どういった学校にしていきたいか」といった教師の思いや「現状の強

方針変更しないと、限られた授業時間の中では無理が生じてしまうことを、研修会などを通して全員で確認したい。研修会の実施によって、教師全員が学校改革に参加できる土壌を作ることが有効と言えよう。

次に「我が校の指導理念や特色は何か」といったS I作りの具体的検討に入るようになる。この段階ではS Iを検討するために数名規模の学校内プロジェクト（例えば「学校改革委員会」「ビジョン委員会」といった組織）を発足させている場合が多い。プロジェクトを編成する場合は、保健や図書を担当も含めて、分掌・学年横断的なメンバーを組み、学校全体のビジョンを考えられる構成にした方が、検討の視野が広がり、施策の合意も取りやすいようだ。

プロジェクトのリーダーは校長などから任命されるケースが多いが、それ以外のメンバーについては、プロジェクト活動を活発にするために意欲のある教師の立候補制にしたり、後からプロジェクトの結論に異論が出ないよう推薦制（委任制）にする学校もある。また若手教師主体のプロジェクトを併設し、合同討論会を持ちながら検討を進めた学校もある。

このとき、S I作りを通じたカリキミを生かして何ができるか」といった現状分析から、S Iを具現化している。つまり、やるべきこと（地域の期待）、やりたいこと（教職員の思い）、やれること（現状の強み）から、現状の課題分析を行いS Iを策定するという流れだ。

保護者や地域の期待については、保護者や卒業生に対してアンケートやヒアリングを実施したり、地元の各中学校を訪問したりして声を集めるという学校もある。そのためにも、ある程度の検討期間が必要になるようだ。ただしこのとき、学校に寄せられたこれらの声をすべて鵜呑みにし、要望

ユラム編成が学校改革という大仕事である以上、プロジェクトの活動だけでは限界があり、管理職にリーダーシップを取ってもらうことも必要になる。管理職がある程度の方向付けをして、具体的な運営・権限はプロジェクトに一任する形が望ましいのではないだろうか。

完全週5日制下のカリキュラムから考える

現段階で実際に行われているプロジェクト活動をみると、早い学校では昨秋から始めている。週1回程度の検討を行い、半年ほどかけてS Iを具現化した上で、今春の新学期指導要領の告示を受けてカリキュラムの検討に入っているようだ。やはりS Iを具現化するにはそれなりの期間が必要になるということだろう。

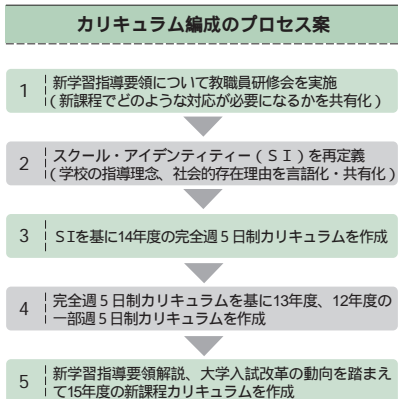
また、既に新課程のカリキュラムの検討に入っている学校は、次のような考え方をしている。つまり、12年度入学生は3年生から、13年度入学生は2年生から、完全週5日制の中で必要単位数を履修しなければならぬことになる。

そこで、この煩雑さを少しでも和らげるため、毎年段階的に単位数が減少

を満たそうとすると破綻が生じたり、教師集団の指導意欲がそがれることになるかも知れない。保護者や地域からの声は考慮しながらも、最終的には、「本校としては（自分たちは）どうしていきたいのか」「何ができるのか」を十分に検討して判断することになると言えよう。

例えば、隣接の学校に成績の優秀な生徒が集まっている現状があると、進学に対する地域の期待も隣接校に寄せられてしまいがちだ。しかし自分たちの学校にも、主体性や意欲をうまく引き出してあげれば学力も十分に伸び得る生徒たちが集まっており、教師の間にも「本人の興味・関心を大切に進学を指導していきたい」という思いが一致していれば、それを最上位概念としてS Iを確立すればよいのではないだろうか。

そのためには、全教師に対して現状の課題や強み、それぞれの思いを確認していく必要が出てくるだろう。プロジェクトの活動内容を常日頃から他の教師全員にもフィードバックし、それに対する意見やクラス担任が保護者会などを通じて得た地域の学校に対する期待などを吸収することで、全教師の意識改革や自分たちの思いの確認につなげていきたい。



していく中でカリキュラム調整をしていくよりは、「まず14年度の完全週5日制カリキュラムを作成し、それから12年度、13年度のプラス2単位カリキュラムを作成する」といった高校が約3分の1を占めているのだ（ベネッセコーポレーション調べ）。さらに、12年度13年度のプラス2単位分には教科・科目を割当てずに「総合的な学習の時間」の試験的な試みを実施するなどの動きも見られる。

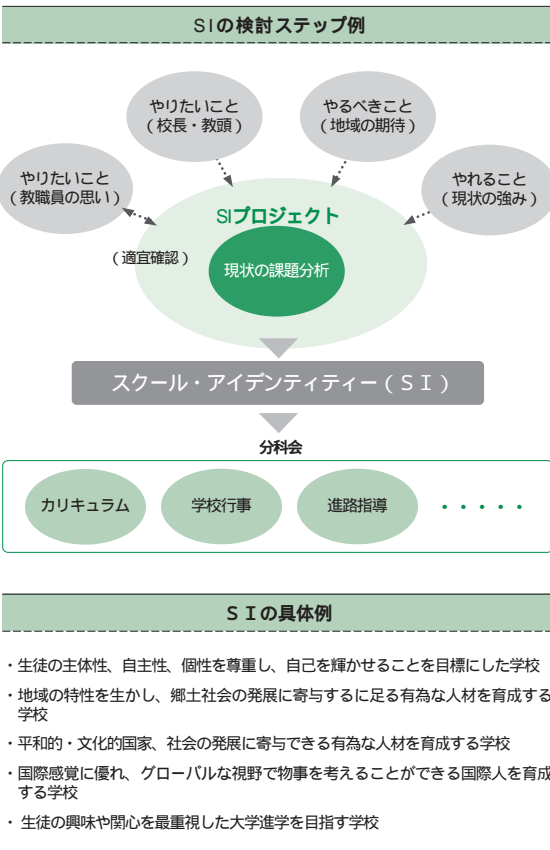
新学習指導要領の解説書が今秋出版され、18年度以降の大学入試改革などを検討している中央教育審議会が11月頃に答申を行う予定となっている。今後はさらに多くの高校が、これらの動きも考慮しながら15年度の新課程カリキュラムを検討していくことになるだろう。

S Iを基にカリキュラムを検討

プロジェクトでS Iが具現化されたら、具体的にカリキュラムや学校行事などの検討を分科会形式で行っていくことになる。この段階ではS Iが確立しているため、カリキュラムの編成や学校行事の精選もさほど困難なことではないようだ。

例えば「英語に比べてこの科目の授業時間が減り過ぎではないか」というような意見が出たとしても、「国際性」などのS Iを全教師が共通認識できていれば理解が得られやすい。また、新課程から新設される「総合的な学習の時間」や「情報」の具体的内容についても、S Iが確立していれば自ずと方向性が決まってくるので、スムーズに検討が進んでいくようだ。

具体的なカリキュラムの検討に入ると、「以前は……」などと話が元に戻ったりして検討が進まないことも多く、S Iを確立し、教師間で共通認識できていることの重要性を痛感することになるだろう。そのためにも、できるだけ早い段階からプロジェクトを発足し、まずS Iを確立することが重要になってくると言えよう。



実践例 福岡県立朝倉高校

21世紀ビジョン委員会を設置し、15年度カリキュラムを通して学校改革に取り組む

新課程を学校改革の好機と捉える

朝倉高校は、スクール・アイデンティティー（S・I）を検討していく一連の活動の中から、完全週5日制、新課程への対応を考えた高校だ。同校は以前から積極的に様々な取り組みを行い、近年の進学実績の伸びも著しいが、一方で高校入試倍率の低下など地方故の悩みを抱えていた。その危機感が新しい動きを後押ししたと言える。

「福岡県の高校入試平均倍率は1.4倍ですが、この地区は1.1倍、創立90年の伝統にあぐらをかいていては学校が消滅しかねない、という危機感がまずありました」（倉鍵君明教頭）
「中学校を訪問する度に、学力上位

層の生徒が私立校や隣の学区の、特色を持った高校へ進学していく流れは止まらないだろうと感じていました。本校入学者の学力レベルも、上位層が抜ける傾向が徐々に明らかになってい

ます」（進路指導主事・荻野幹生先生）
その中で、「学校の活性化、特色化を考えていこう」との倉鍵教頭の呼び掛けが以前からあり、昨年10月「朝倉高校21世紀ビジョン委員会」が発足した。活動は学校の将来像を描き、学校哲学を考えることから始め、同校を「高校生としての基礎・基本を学ぶことを通して、主体的に物事を考え、自ら解決し、情報発信能力を身に付け21世紀を切り開く力を有する生徒の育成を目指す学校」として改めて位置付けた。

そして、短期目標として「大学合格率を高める」、中期目標として「完全週5日制と新課程への対応」、長期目標として「より地域の中核となる学校を目指す」の移行」といった3段階での目標を設定。それぞれの課題を洗い出し、その理念と具体的方策を打ち出しつつある。設定した目標からも、同校が単なる新課程への対応にとどまらず、その枠組みを越えて、「朝倉高校はどうあるべきか」という根本に立ち返って、そこから新課程を考えていこうとしていることが分かる。

「現在、朝倉高校だけでなく、日本の高校自体が立ち行かなくなっている。生徒は受け身で授業を聞いているだけ。そして効率よく知識を吸収し、効率よくその知識を吐き出した者が大学入試に合格しているのが現状でしょう。新学習指導要領は、これまで以上

委員会が話し合う中で問題が見えてきた

ビジョン委員会のメンバーは全教師への公募によって集められた。

「私は昨年、この学校に赴任してきました。きちんと挨拶する、素直な生徒が多いなどというのが最初の印象でした。そういう立派な高校が今後どうなっていくのかを先生方と話す中から、委員会に応募することを決めました」（1学年主任・吉松俊夫先生）

公募の結果、委員会は教頭の他に、教務主任、進路指導主事、1学年主任、2学年主任、企画・研修主任の5名でスタート。「本当はもっと若手に参加して欲しかったので、その点は残念だった」と倉鍵教頭は言うが、今年になって新たに30代の教師を中心に5名が加わり、11人体制で臨んでいる。

福岡県立朝倉高校



倉鍵君明
教頭 国語科担当
同校に教頭として赴任して4年目。「自学自習、主体的に情報発信して社会のつながりを見つけていく生徒を育てたい。」



丸山 猛
昨年度から教務主任 物理担当 同校に赴任して6年目。「本校の生徒は素直だが、反面、進路から学ぶ意識が低い。積極的に進路を促す生徒を育てたい。」



荻野幹生
昨年度から進路指導主事 日本史担当 本校に赴任して2年目。「朝倉高校のO・B・C。教頭（倉鍵君明）と一緒に地域に根ざった学校にしていきたい。」



吉松俊夫
1学年主任 化学担当 本校に赴任して5年目。「本校の根が強い生徒が多い。強さを兼ね備えた、自分で生きる道を切り開く力を持った生徒を育てたい。」



中神智文
進路指導部所属 国語科主任 本校に赴任して12年目。「生徒の素直さがこの学校の長所。生徒たちの個性を生かしながら新課程を考えていきたい。」

委員会の会議は週1回、17時半から19時半までの2時間。短期・中期・長期目標を念頭に置きながら、新学習指導要領に関する資料の読み合わせ、学習会から始め、そこから朝倉高校の未来像を語り合っていた。また、比較的身近な問題、授業のことが弱いとか、その時点で校内で起きた重要な事柄なども議題に取り上げた。

「メンバーが集まって朝倉高校のビジョンについて話をするということ自体が、問題意識を顕在化させるのに大いに役立ちました」（荻野先生）
「自由にフランクに夢やビジョンを語り合って、時間が遅くなっても楽しい会議でした」（倉鍵教頭）
会議で話し合われた問題、そこから出てきたアイデアは、ビジョン委員会の中だけに収めておかず、できるだけ他の教師に情報として流すようにした。臨時に職員研修会を開き、会議の内容を伝えたり、逆に他の教師の意見を吸い上げるようにした。

「少しずつでもビジョン委員会での話を他の教師の間にも浸透させたいと思ったのです。ただ、積極的に受け止める教師もいれば、否定的に受け止める教師もいるなど、教師の中には多少温度差もあったようです」（教務主任・丸山猛先生）

まず15年度のカリキュラムを編成

ビジョン委員会では完全週5日制と新課程への対応という中期目標の具現化が学校改革のコアの部分になるとの認識から、この点について最も時間と精力を注いで検討を重ねた。そして、「本校の目指す生徒の育成を通して、引き続き地域の中心的役割を担う学校として位置付け、生徒の進路目標の実現を支援するため、大学進学を前提とした教育課程の編成を行う」という基本方針を立ててS・Iの言語化と共有化を図り、その上で新課程のカリキュラム編成の草案作りに入った。

特徴的なのは、15年度、つまり新課程が始まる年のカリキュラムをまず立て、そこからさかのぼって14年度以前のカリキュラムを立てる方針を採ったことである。新課程への対応としては14年度のカリキュラムをまず作成し、そこから12、13年度を作成するか、単年度ごとに作成する高校がほとんどである。なぜ15年度から着手したのか。
「学校改革の力ギになるのが15年度の新課程ですから、学校の在り方を決めるためにはまず15年度を作成して、その着地点から逆算していくべきだと

朝倉高校の新カリキュラム編成のポイント

- 1. 編成の基本方針
本校の目指す生徒の育成を通して、引き続き地域の中心的役割を担う学校として位置付け、生徒の進路目標の実現を支援するため、大学進学を前提とした教育課程の編成を行う。
- 2. 編成の要点
選択履修方式ではなく、高校生として身に付けるべき基礎・基本を重視した教育課程とする。
1学年当たりの総単位数を週32単位とする。
7時間授業の日を週当たり2日とし、LHRと総合的な学習の時間（各50分）を配置する。
1単位時間を55分とする。
総合的な学習の時間の105単位時間は、70時間分は1、2年次の週時に組み込み、残り35時間分は3年次に年間を通して実施する。

平成15年度入学生用教育課程表(草案)								
教科	科目	学年 (標準単位数)	1学年		2学年		3学年	
			共通	文系	理系	私立文系	国立文系	国立理系
国語	国語表現	(2)						
	国語表現	(2)						
	国語総合	(4)	5					
	現代文	(4)		3	2	4	3	2
	古典	(4)		3	3	3	3	3
地理歴史	古典講読	(2)				3		
	世界史A	(2)	2					
	世界史B	(4)		2		6	4	
	日本史A	(2)						
	日本史B	(4)		2				
公民	地理A	(2)						
	地理B	(4)						
数学	現代社会	(2)				2	2	2
	倫理	(2)						
	政治・経済	(2)						
	数学基礎	(2)						
	数学	(3)	4				2	
	数学	(4)		3	4		2	
	数学	(3)						5
	数学A	(2)	2					
	数学B	(2)		2	2		2	
	数学C	(2)						2
理科	理科基礎	(2)						
	理科総合A	(2)						
	理科総合B	(2)	2					
	物理	(3)						
	物理	(3)						
	化学	(3)			3	3		
	化学	(3)		4				3
	生物	(3)						4
	生物	(3)						
	地学	(3)						
保健体育	地学	(3)						
	体育	(8)	3	3	3	2	2	2
芸術	保健	(2)	1	1	1			
	音楽	(2)						
	音楽	(2)						
	音楽	(2)						
	美術	(2)	2					
	美術	(2)						
	美術	(2)						
	工芸	(2)						
	工芸	(2)						
	工芸	(2)						
外国語	書道	(2)						
	書道	(2)						
	書道	(2)						
	オーラルコミュニケーション	(2)	2					
	オーラルコミュニケーション	(4)						
	英語	(3)	4					
	英語	(4)		4	3	2		
	リーディング	(4)				6	4	4
	ライティング	(4)		2	2	3	3	2
	家庭	家庭基礎	(2)	2				
家庭総合		(4)						
生活技術		(4)						
情報	情報A	(2)	1	1	1			
	情報B	(2)						
	情報C	(2)						
総合	総合的な学習の時間	(3)	1	1	1			
	ホームルーム活動	(3)	1	1	1	1	1	1
特活	合計		32	32	32	32	32	32

「総合的な学習の時間」については1、2年生は週時に組み込み、3年生は年間36時間行うものとする。
地理歴史の選択は、2年生で世界史Bを選択するか否かによって2通りの選択となる。

うのが本音です」(丸山先生)

また、15年度の必修単位数をまず決めて、それを14年度入学生から前倒しして実施すれば、14、15、16年度入学の3学年の生徒の単位数がバラバラにならず、学校行事などをスムーズに実施できるという点も考慮した。

ビジョン委員会では15年度のカリキュラム案を1人1案ずつ持ち寄り、それらをすり合わせ草案を作った。新課程では単位数が減るため、教科の間で時間の取り合いになることが一般に懸念されているが、「委員会ではそういう意識は全く捨てて」(丸山先生)カリキュラム草案作りに取り組んだ。

今後、でき上がった草案をたたき台にビジョン委員会とは別の、教育課程検討委員会が正式なカリキュラム編成を決めるが、この委員会に各教科主任が入っていないのも、こうした点を配慮したためだという。倉鍵教頭は「教育課程は教師のためにあるのではない。生徒のためにあるはず」と言い切る。

「総合的な学習の時間」「情報」を十分に検討

具体的に15年度のカリキュラム草案を見てみよう。大学入試の学力を付けさせることを目的に、国・数・英を1

授業の改善なくして学校改革はない

授業時間の50分から55分への変更も、朝倉高校のカリキュラム草案で打ち出されている(実際には完全週5日制が始まる14年度から55分授業になる予定)。現行からの単位数減に伴う学力低下を防ぐことと、1単位ごとの授業の質を高めるねらいがある。

「本校では国・数・英を中心に、授業の中で復習用の小テストをやるのが普通です。そうすると、50分の授業が

2年次に重点的に配置し、その分地歴公民・理科を2、3年次に持つていく編成が採られている。

新課程の目玉と言えるのが、「総合的な学習の時間」(以下「総合」と「情報」)。ビジョン委員会でもこの2つを重要なポイントと位置付けた。

「共に新学習指導要領で謳っている自主的、主体的に物事を考え、判断し、能動的にかかわっていく能力を育てるための典型的な時間です。その意味で新課程の中心的課題が現れていると言えるでしょう」(倉鍵教頭)

ビジョン委員会でもこの2つについては、S・Iを考慮しながら検討した。その結果、「総合」については現在L・H・Rや放課後に行われている進路学習活動、「フロンティア21」をこちらに移して展開することにした。「総合」の検討の中心となった荻野先生はこう語る。

「進学する生徒が多い高校として、生徒が自分の将来や生き方を考える学習を行っていきたくて考えました。ただ大学に合格すればいいというのではなく、なりたいたい職業や学びたい学問などをじっくり考え、その上で自分の目標や好み、適性に合った大学、学部・学科を見つけることが大切です。この進路学習を『総合』『フロンティア21』の時間)として確保すれば余裕を持つ

実質40分とか45分になってしまふ。55分授業にすれば、丸々50分の授業を組むことができます」(倉鍵教頭)

授業時間の変更の他に、「自学自習時間」の設定や生徒による授業評価、研究授業など、新しい試みも提案されている。「自学自習時間」は、新課程対応カリキュラムへ漸次移行していく過程で、12年度と13年度に生じる週1時間の空き時間を利用した、生徒の自主的な学習態度を育てる時間だ。余った時間をどの教科に割り振るかで頭を悩ませるより、生徒の主体性を尊重して、自分たちで課題を発見させ、学習に取り組

「総合的な学習の時間」の内容	
テーマ	進路学習 - 高校生としての在り方を考える -
主旨	調査・研究・体験を通して、主体的に進路について考えさせる。また、思考力や自己表現力を高めるためにディベートや弁論を合わせて実施する。
具体的取り組み	1年次 <ul style="list-style-type: none"> 職業観育成 <ul style="list-style-type: none"> 作文(「将来の自分」) 調査研究 その職業についての資料・情報集め) 弁論(その職業についての紹介・自慢・思い・熱意) 作文(他の人の意見発表を聞いての感想・新たな決意) 職業体験 講演会(社会人講演会)
	2年次 <ul style="list-style-type: none"> 学部・学科研究 <ul style="list-style-type: none"> 職業に必要な能力・資質研究 社会が求めている能力を研究(講演や職場訪問等) 学部・学科の詳細を調べる ディベート・論文(学問の意義等) オープンキャンパスへの参加や大学訪問 講演会(学問について)

「情報」の内容 現在の科目選択案/情報A

学年別授業内容	1年次 <ul style="list-style-type: none"> 新学習指導要領の「内容」の項目(1)「情報を活用するための工夫と情報機器」及び(2)「情報の収集・発信と情報機器の活用」に基づいた構成とし、後半では特に自己実現のための学習としての職業観の育成に基づく資料や情報収集などの実習を中心に行う。
	2年次 <ul style="list-style-type: none"> 新学習指導要領の「内容」の項目(3)「情報の総合的な処理とコンピュータの活用」及び(4)「情報機器の発達と生活の変化」に基づいた構成とし、後半では特に自己実現のための学習としての学部・学科研究に基づく資料や情報収集などの実習を中心に行う。

て、しかも毎週計画的に進めることができます」

また、「L・H・Rが進路学習から解放されれば、この時間を使ってその時期その時期のクラスの状況を考慮した本来のL・H・Rとしての指導が行える」(吉松先生)という利点も出てくる。

「総合」では、具体的には1年次で職業観育成、2年次で学部・学科研究、3年次でまとめのための作業に取り組む。作文、職場訪問、講演会など各学年の各時期に何をやるか、既に内容は詰められている。

さらに「自分の考えを自分の言葉で表現することがこれからは求められます。その修得をテーマに1、2年生共通で弁論大会やディベートなども絡めていきたい」(荻野先生)と言った。

「情報」については進路指導部の中

ませようと考えたのだ。また、完全週5日制が始まれば、ますます家庭での学習が重要になる。この取り組みはそれを意識した仕掛けとも言えるだろう。

「生徒による授業評価は2年前に研修部から出された課題です。研修部と具体的な方法を検討し、今年度中には実施するつもりです。研究授業は昨年までは教師1人が3年に1度やるようにしていましたが、今年から1年に1度行うようにしています」(丸山先生)

授業の充実に向けた様々な試みを模索する背景には、「新課程を形だけのものに終わらせたくない、それには授業

神智文先生が中心になってプランを練った。新学習指導要領では「情報」は「情報A」「情報B」「情報C」の3科目が提示されているが、朝倉高校では「情報A」を選択することにした。

「BとCはコンピュータや情報ネットワークの仕組みなど、どちらかと言うと理系的要素が強く、Aは情報の収集・発信の知識と技能が中心です。生徒には単にコンピュータ技術の習得だけでなく、自ら情報を集め、自ら発信していく能力を付けてもらいたいと考え、Aを選択しました」(中神先生)

また、「総合」の進路学習とタイアップして、「情報」の授業の中でコンピュータを活用した進路情報の収集・研究や、生徒全員にメールアドレスを持たせ、情報発信を積極的に行うなどの案もあるという。

の充実が不可欠だ」という信念がある。

「授業の改善が学校改革の要です。授業改善は外からは見えませんが、毎時間ある授業を改革しなければ制度改革をする意味がありません。改革の一番最後に残って、しかも簡単なようで実は一番難しいのが授業の改善です。しかし、私たちが描いている夢、理想に近付くためには授業の改善はなくてはならないんです」

倉鍵教頭の力強いメッセージから、S・Iの確立に始まった朝倉高校の挑戦が、着実に進んでいることが伝わってくる。